



Title	文永の役に神風は來なかつた、という荒川理博の新説について
Author(s)	山口, 秀樹
Citation	懷徳. 1961, 32, p. 71-85
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90362
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

文永の役に神風は來なかつた、という

荒川理博の新説について

山口 秀 樹

神 風 は 台 風

昨年は一昨年と同様、台風の當り年と言われたが、さて本年はどうであらうか。台風は毎年三十近く發生し、その四割は日本近海に接近して平均年四個は上陸すると言われる。一昨年の伊勢灣台風は九月廿六日であつたが昭和九年九月廿一日の室戸台風を堺市出島で迎えた私は台風の慘害が如何に悲慘であるかを身を以て體驗した一人である。當時の被災者に對し御見舞として頂いた府、市からの五圓と四圓、殊に陛下から御下賜の手の切れるような武内宿禰の紙幣は今も猶ありがたく、これは思出の記念として永久に傳えたいと思つてゐる。

台風はかように昔から毎年我國に大小幾つかの損害を與えて來たが、只二つ我國を護つた大風がある、と教わつて來た。申す迄もない蒙古襲來の元寇である。

元寇は御承知の通り、今から六八七年前の文永十一（西暦一二七四）去になよ（蒙古兵なんか早く失せる）年十月と、それより七年後の弘安四（一二八一）去ねや（い）去つて失え年七月の二回で、我々は歴史で、この前古未曾有の大國難を克服し、金甌無缺の國體を護持し得たのは全く此の二回の伊勢の神風のおかげである。と叩き込まれて來たが、何故か先生はどの先生も「台風たつたんだよ」とは言つて下さらなかつた。

四百餘州を舉る

私等の育つて來た明治、大正の時代は青壯年日本の成長發展期で、富國強兵のスローガンのもとに、日清（明治廿七、八年、一八九四―九五）、日露（明治卅七、八年、一九〇四―〇五）、第一次世界大戰の日獨青島戰（明治四十七年に當る大正三年の一九一四）と十年毎に連戰連勝意氣大いに

揚がつた壯年日本は益々軍備に熱中したのである。かく

して日本は好戰國民だとか、第二の蒙古だとか見なされ、ドイツのカイゼル・ウィルヘルム二世の如きは盛んに「黃禍論」を打つて、自己のアジア侵略に對する惡評の眼を我國にふりむけさせようとしたものである。かくて昭和六（一九三二）年九月の柳條溝、同十二年七月の蘆溝橋（西洋人はマル・ポーロ・ブリッジと呼んでいる）と盲滅法に突き進んだトドのつまりは太平洋戦争に發展してしまつた。氣象學上の一現象に過ぎぬ此の台風を、戦時中いかに「神風」という二字を神秘的に濫用したことか、そしてまた戦後は如何に下落したことか。

戦争の時は軍歌が高唱される。白露戦争の時、我等小學生は學校の授業はやめて、毎日停車場の線路に沿うて軍歌を唱い、日の丸の旗を打ち振つて出征兵士を歡送したが、その時は「敵は幾萬ありとても」「煙も見えず雲もなく」とか「四百餘州を擧る」とかであつた。それが青島戰や滿洲事變、支那事變の頃になると「ここは御國を何百里」「遼陽城頭夜はたけて」の軍神橋中佐や「荒波吼ゆる風の日も大潮むせぶ雨の日も」の上村艦隊の蔚山沖など澤山あるが、白露以來今度の太平洋戦争を通じて最も戰意昂揚の役を背負わされたものは「四百餘州」の元寇の歌であり、時宗の歌であり、神風の歌であつた

ろう。

ところで、この「十萬餘騎の敵」は「弘安四年夏の頃」で、これは二度目の時で、次の「多々良濱邊の戎夷」の歌詞は最初の文永の役の際の事で、敵は博多灣西南の咽喉、能古島の對岸の今津、それより漸次東に向つて百道原、博多、箱崎方面、更に他の一隊が多々良濱邊から上陸したので弘安の役ではない文句なので、この歌詞は頗る勇壯で血湧き肉躍るの概があるが、史實は全く前後混錯、年代を顛倒しているのである。

こんな誤りは最近でもよく見かける、困つたものである。昭和卅三年度藝術祭參加作品の某映畫「日蓮と蒙古大襲來」なるものが出來たが、その宣傳ビラに「四百餘州をこぞつて迫る百萬の大船團」とか、その映畫のトリック「神風をつくる」という題で某有力週刊紙の色刷りグラビヤ大版の解説に「文永十一年夏、九州博多灣に攻め寄せて來た蒙古十萬の軍勢が云々」とあるが、文永十一年は十月も二十日で夏ではなく、兵數も四萬内外、非戰鬥員の梢工、水手の乗組船員等を含めても池内宏博士は三萬三千餘り、高麗史に據られた相田二郎氏の三萬九千七百にしても四萬以下である。「十萬」とあるからは、弘安四年夏と訂正すべきである。

文永の神風に疑問を持つ

私は文永の役の神風にはどうも腑に落ちぬ點を持ち續けている一人である。それは文永十一年の十月の二十日の夜に突然起つた大風雨のために敵の艦隊は悉く消え失せて翌二十一日の朝には昨日まで海をおうていた敵の大艦隊が影も形もなくなつたというので、人々は「伊勢の神風」とか、「石清水八幡の御神威」とか、夫々晶眞々々の御神徳を崇めたたえたというのである。問題は十月二十日である。

舊曆は新曆に換算せねばならぬ

申すまでもなく、國史上の月日は殆ど舊曆の太陰曆である。曆制の改正は明治五（一八七二）年十一月九日の詔により、明治五年十二月三日を以て明治六年一月一日と爲す旨の發布を見て今日に及んでいるから、それ以前の月日を其のまま鵜呑みにしてかかると、季節感に大變な間違ひを生ずるのである。例えば、湊川の合戦は延元元（建武三、一三三六）年五月二十五日であるが、實は新曆の七月十二日に當るので、梅雨明け前後のむしろ夏の直射に、あの重い鎧を着、具足をつけての激戦である。大體朝の八時頃から午後四時（梅松論によると正成の死は申の

刻）頃まで約八時間に及ぶ苦戦である。新手を持たぬ大楠公部隊、出陣以前、既に討死を決心していた彼としては最早やこれでは覺悟の程が察せられるではないか。新曆に直して見て始めて判る眞相なのである。

従つて此の文永十一年最初の來襲の最後の日、即ち十月二十日の日は現行の新曆に直して見ると一カ月おくらしても十一月二十日で、精確な換算はもつと遅れるであらう。そんな十一月の末頃にそんな台風が果して來たのであらうか？という疑いが、どうも解決つかずにいたのである。

大森金五郎氏の文永暴風疑問説

ところが、大正も十（一九二一）年、ワシントン會議で海軍々縮會議で世界は再び何となく風穩かならず太平洋の波徒らに高からんとする頃、明治四十四年版日本歴史地理學會編纂の「日本海上史論」という絶版物を手に入れた。それによると、同學會の委員で、たしか學習院の教授であつた文學士大森金五郎氏の

「文永弘安の役」

の題下の 一五五頁に

さて蒙古の退散したのは、どういふわけかといふと、世間で云ふ處は、此時大暴風があつて、それが爲めに蒙古が退散したといふ様に書いてあるが、果して大暴風が有つたか、ど

文永の役に神風は來なかつた、という荒川理博の新説について

七四

うか、少しは有つたかも知れないが、大したことは無い。どうもシツカリした物に暴風のあつた事は書いて無い。朝鮮の「東國通鑑」にはチョット見えて居るが、……尤も多少暴風もあつたかも知れぬが云々

と、ある。さては自分の疑いが當つたのか、と喜んでゐたが、大正十年五月版の同氏の「大日本全史」中卷（自三〇九、至三二〇頁）には

蒙古が退散したのは如何なる故かと云ふに、世間では其の夜（十月二十日の夜）暴風があつた夫がため賊艦が漂蕩し溺死者も多かつた爲めであるといふ。なる程暴風のあつた事は事實であるが云々

と、今度は十年前の「日本海上史論」の暴風疑問説が又逆戻りした様な印象をうけてガツカリした。

荒川理博の文永神風爆笑論

ところが、ここに新しく文永暴風説を一笑に附した爆弾的新説を叩きつけた氣象學者が現われた。それは氣象研究所員の理學博士荒川秀俊氏で、一昨々年の昭和三十三年六月三日の「日本經濟新聞」に發表されたもので、その論旨を摘出すると

神風は來なかつた

科學者のみた「文永の役」

なる題下に

太平洋戦争このかた、ゆがめられていた我が國の歴史は相

當に書き改められて來たけれども、まだまだ誤りが多い。歴史家でない私のような科學者の目から見ると、全くふき出しなくなるようなことが、平氣で専門歴史家の手で書き寫され、語りつがれ、出版されている。いまその一つの例として、世に名高い元寇についての誤りについて述べて見たい。

文永十一年十月と、弘安四年七月の二回の元寇は、まさに有史以來の大事件であつた。その結果はともに「神風」すなわち台風の襲來を以て終りをづけ、敵は徹底した壊滅のうき目をみ、わが軍の勞せざる大勝利に終つたことになつてゐる。普通の常識のあるものは、これはおかしいと思われるに相違ないのであるが、これが、日本の歴史家の間に堂々と通用しているのだから不思議である。

例へばここ一ケ年の間に刊行された相田二郎著「蒙古襲來の研究」・「岩波小辭典・日本史」、山川出版社「日本史小辭典」などの名著でも、明らかに文永の役も、弘安の役もともに台風もしくは暴風雨のおかげで、一夜のうちに敵軍は壊滅したことになるのである。

事實において、弘安の役には確かに神風のお助けがあつた。即ち弘安四年七月晦日（みそか）（現行曆での八月二十二日）夜半から翌日の閏（うるう）七月一日にかけて九州には大暴風雨が起り、近畿地方でも暴風雨になつたという記録が残つてゐるし、その暴風雨で、元軍の遺棄した士卒は十余萬に達したと「元史」は報じてゐる。マルコ・ポーロの「東方見聞録」や「八幡愚童記」の記すところによると、このとき北九

州では北風がものすごく吹いた、というから、台風は九州の南部か、九州の南方海上を通つて北東に進んでいったのではないかと思う。八月二十二、三日といへば、二百十日（普通は九月一日ごろ）も近いのだから、まさに台風シーズンたけなわで、その神風が台風であつたことは、ほぼ間違いない。

然し、文永の役は違う。元軍が忽然として見えなくなったのは、舊暦で文永十一年十月二十日（現行暦での十一月二十六日）夜のことで、十月二十一日朝には、敵船が一隻も見えないので、どこへ逃げようかと戸惑つてた北九州の人々は、われとわが目を疑つたのである。冬といつて差支えない十一月二十六、七日ごろになつてから、日本へ台風が来るなどということは先ず考えられないし、理科を習つている中學生にそんな話をしたら一べんに笑われてしまう。私はかつて五十年間にわたる氣象廳の台風資料について調査したことがあるが西日本へは十月三十一日以後に台風が襲來したことは一回もなかつた。大體、台風シーズンは、西日本はほとんど早目に終つてしまうものであつて、關東地方などは、まれに十一月に入つてからでも来る台風はあるが、九州へは十一月末になつてから来る台風はまずないといつてよい。

氣象學的にいへば、北九州へ文永十一年十一月二十六、七日に台風が來たとは到底考えられないのである。日本側に残つてゐる史料を東京大學史料編纂所などで調べて見ると、當時風雨がはげしかつたという確實な記録はない。わずかに目に觸れたのは「八幡愚童記」に、逃げまどつた人々があすは

どこへ落ちようかと心弱くなつて、おりから降る雨にそでをぬらした、という位の記事があるだけである。これに反して、「東國通鑑」など敵方の記述はしつかりしている。

七月晦日の夜、軍議を開いて敵前撤收を決めた。夜陰に乘じて困難な敵前撤收と決めたのだから暴風雨であつたはずはない。しかし日本軍を前にして夜のとほりを利用して撤收するには不都合なくらいの大風雨（シナ流の表現）があつた。しかし撤退作戦はうまくいった。ほとんど無疵で撤收できたものらしく、「きのうの夕べまで所せきし賊船一そうもなし（八幡愚童記）」というのだから、難破船もなかつたのであろう。「東國通鑑」によると、十一月には敵軍は歩武堂々と合浦に歸り勅使に慰勞されているが、そこに「還らざるもの無慮一萬三千五百余人」と記している。この未歸還者の大部分は流行病で陣歿したに相違ない。ところが、日本の歴史家は「東國通鑑」などの記事をノリとハサミでつぎあわせて「くだけ、溺死およそ一萬三千五百余人、余賊皆のがる（山田安榮編、伏敵篇）」といった神風論をデッチ上げた。驚き入つた次第である。

と、いうのである。實のところ私は初めは大いに期待を持つて何度も読み返し、之を切抜いて相田二郎氏の遺稿の新刊「蒙古襲來の研究」に貼付けているが、劈頭先ずガッカリしたのは、右の文中「七月晦日の夜、軍議を開いて敵前撤收と決めた」という所は、どうもおかしい、

文永の役の時十月二十日の夜である。博士は弘安の役と文永の役の暴風雨の夜の月日を取違えていられるようだ。一度博士に問合せて見ようかと思つたがついそのまゝに過ぎてしまつたところ、

翌三十四年四月に出された「日本と世界の氣象」四一頁に訂正されていることを後になつて知つた。

それよりも先ず「東國通鑑」である。久し振りに中之島圖書館に行つて驚いた。土曜の夏の暑い午後の陽に晒されての長蛇の列。

「東國通鑑」の文永の役

東國通鑑は、李朝の徐居正らが成宗の命を奉じて撰した五十六卷の勅撰史で、かの有名な宋の司馬光(司馬溫公のこと)の撰にかかる「資治通鑑」の體裁を眞似た、新羅、高句麗、百濟及び王氏高麗の編年史で、上古の朝鮮史は勿論、日韓古代史の研究には缺くことの出来ぬ大事な本で、水戸光圀の如きは既に寛文六(一六六六)年に之を出版して日本學者の朝鮮古代史研究の便を圖つてゐる位である。

中之島の圖書館では李克墩の二十二冊物の大型和本の内の「東史十四」の部と、明治十六年補刻、京都出雲寺松柏堂藏版の三十冊物の大型和本の「第十九」の部と、

明治四十五年版の朝鮮群書大系、續、第三輯で、朝鮮古書刊行會の洋書三冊物の「中」の部と都合三種の本を突き合せて、我が文永十一年に當る至元十一年(高麗では元の正朔、即ち元の曆數年號を用いて元の屬國となつていた)の

「冬十月」の項を見ると

忽敦(元史では忻都)曰。雖蒙人習戰。何以加此。諸軍終日戰。及暮乃解。

軍司令官會議で、元軍總司令官である都元帥の忽敦(忻都のこと、蒙古音と同音の漢字を宛てはめたもの)が曰うに、蒙古軍は驍馬野戰に習れ百戰鍊磨の士と云われるけれども、これ以上戦うことは無理だ、諸軍は終日よく戦つて疲勞し切つてゐる、地理不案内な敵地は物騒なので、日没に及んで海上に引揚げよう、というのである。

想うに彼は上陸第一日目の我が軍の抵抗が、これまで彼等が大陸の諸民族との間に經驗した戦鬪とは未だ嘗てとも比較にならぬ頑強な抗戰振りに膽をつぶし、おまけに陸上基地を確保するまでの段階になつて居らぬ戰績に不安を感じたのであろう、日没と共に不便を忍んで海上の母艦や母船へと引揚げを主張したのであろう。これに對し

方慶(金方慶のこと、高麗の都督使で、いわゆる三翼軍つまり三兵團のうちの中軍の司令官で、高麗軍の最高司令官)謂。忽敦、茶丘。

(洪茶丘のこと、元の右副都元帥で忽敦に次ぐ司令官で、蒙古では日本と反對で左より右の方が上位)

曰。我兵雖^モ少^シ。已^ニ入^ル敵境^ニ。人自^ラ爲^ス戰^ヲ。即^チ孟明
焚^ル舟^ヲ。淮陰背^キ水^ヲ也。謂^フ復^ビ快戰^ニ。

かくの如く、愈々荒川理博の云われる二十日夜の軍議
が開かれたのであろう。その時、高麗中軍の司令官であ
り、朝鮮兵團の最上席司令官である金方慶が、蒙・漢・
高麗連合軍總司令官たる忽敦（忻都）と、その次席司令
官たる洪茶丘將軍とに進言して申すには

我が連合軍の兵數は日本軍に比してなるほど少いけれども、
すでに敵地日本に侵入しているのだから、味方の兵隊各自
は好むと好まざるとに拘らず、最早や只戦うより外に道はな
いと皆覺悟を決めているのである。故に明朝未明、我が乗艦
船を皆燒き捨てて敵前上陸を再敢行しようではないか、これ
即ち淮陰侯韓信（蕭何、張良と共に漢の高祖の三傑）の背水
の陣である、希くば今日の様に再び得意の陸上戦を續行させ
て頂きたい。

と、とてつもない思い切つた苦肉の獻策をやつた。と
ころが、總軍司令官の忽敦の忻都は、之に答えて曰く
小敵之堅^ハ。大敵之擒^{ナリ}。策^ニ。疲兵^ヲ。戰^フ。大敵^ニ。非^ニ。完計^{ナリ}。
也。不^レ。若^シ。回^ル。軍^ヲ。

すると、忽敦は金方慶の言に答えて

兵法の書「孫子」の謀攻篇を引用している「史記」の淮陰
侯即ち韓信の同じ傳記を援用して、小人數の敵の堅く死守し

ても、結局は多數の大敵には敵すべくもなく最後には擒に
せられ捕虜となる。つまり小部隊の兵員は如何によく守つて
いても、大部隊の人海作戰の前には敵すべくもなく最後には
生け捕られ捕虜になるのがおちである、と兵書は訓えている。
終日戦つて疲れ切つてゐる小數の兵隊に鞭つて無理に大敵た
る日本軍と戦つても策の得たるものではない、若かず、今度
はこの位にして一應退軍し、然る後、兵員裝備その他を完全
にして出直すのが上策である。

つまり、この所が博士の言われる同夜の敵前撤收の
軍議の場面であるが、十月二十日の戦鬪後の蒙・漢・高
麗連合軍の司令官會議があつたことは間違ひなく、連合
軍總司令官は僅か一日だけの戦いで引揚げるといふのは、
我軍將士の勇戦敢闘振りに怖じ氣づいた事もさること乍
ら、日本軍の後方補給源に對し、彼は消耗せる將兵、弓
矢等の軍需品、食糧を敵地に求むることの不可能、海上
遠距離による輸送の補給難に對する絶望感は察するに餘
りがあるが、また敵軍司令官相互間の不和反目による軍
の不統一、それに伴う士氣の低下が其の一因たるは恐ら
く間違ひあるまい。役後に起つた洪茶丘の金方慶報告事
件の遠因は既に此時に發して居たのではなからうか。

また高麗軍上席司令官たる金方慶が自分等の乗艦船舶
を自らの手で燒き捨ててまでも、ややもすれば海路退軍
せんとするその逃げ腰を叩き切ろうとの苦肉背水の陣に

しても、事は餘りにも勇まし過ぎる議論ではないか。

一體この「東國通鑑」なるものは、高麗王氏三十四代、四七四年で高麗が滅んで、(李成桂の元中九年、クレーターによる。日本では南北朝合一の年の西暦一、三九二)、李朝も

既に七代の世祖が儒臣に命じて上古以來、前朝迄の史料を年代順に編纂させたのが完成せず、その孫の九代成宗の代になつて、前者の遺緒を繼ぎ、徐居正が主となつて續修したもので、長い間心ならずも強壓を受けていた暴力帝國の元も十五代、一六三年で敢えなく亡んだ(一三六八年で日本の應安元年、足利義満が將軍となつた年)後に書かれた高麗本位の史書なので、相當割引して讀まねばなるまいが、本問題に關する最も重要な文句が次に出て來るのである。即ち

復亨(征東左副元帥劉復亨のこと、右副元帥の洪茶丘の次の

軍司令官)。中流矢一先登レ舟。故遂引レ兵還。

會、夜大風雨。戰艦觸レ巖崖多敗。

佺(高麗軍都督副使で、左軍使の金佺のこと、高麗では右軍

使の金文庇より上席で、金方慶に次ぐ軍司令官)。

墮レ水死。

博多箱崎方面に上陸した賊軍は敵の本隊で、この方面のその日の我軍の總司令官は少貳資能の子の經資の弟で少貳三郎左衛門景資であつたが我方の有力史料である「八幡愚童記」

によると、その景資が百道原(もしじばる)で敵の馬上から射落した蒙古軍一方の大將軍、流將、公なるものは、捕虜の蒙古兵の言によれば、それは敵連合軍の次席司令官たる劉復亨だつたらしく、正に敵側の史料たる「東國通鑑」と一致している。

かように敵は其の上席司令官の重傷突發により、彼は眞先に母艦に收容され、士氣沮喪遂に敗兵をまとめて各自艦上に引擧げたのである。

ところが、たまたま其の二十日の夜、大風雨が吹き起り、千石船級の大戦艦も島の巖角や海岸の岩礁に吹きつけられて大損害を受けたが、その際、高麗軍の次席司令官たる金佺は海中に轉落溺死するという事故が起つてしまつた。

この會々夜大風雨の所を博士は敵前撤收をするに際しての支那流の大袈裟な表現と獨斷して居られるが、果してどうであらうか。それでは敵側の他の史料「元史」を調べて見よう。

「元史」の文永の役

「元史」は明の宋濂(そうらん)の撰で、その卷二百八、列傳第九十五、「外國」の部の高麗に次で「日本傳」がある。その文永の所を見ると

十一年(元の至元、我が文永)、三月、命鳳州經略使忻都(東國通鑑の忽敦)、高麗軍民總管洪茶丘以千料

舟、拔都魯輕疾舟、汲水小舟、各三百共九百艘。載士卒一萬五千。期以七月征日本。冬十月入其國。敗之而官軍不整又矢盡。惟虜掠四境而歸。

至元（我が文永）十一年三月、元は鳳州經略使の忻都と、高麗駐留の總督の洪茶丘に命じて、大中小各三百、合計九百艘の艦船を合浦（馬山附近で鎮海灣の一部）に集結せしめて、兵一萬五千の士卒を分乗せしめた。

千料舟——千石積める船、即ち千石船のことで、運送船兼用の甲板のある大型戰艦で、兵隊の外、軍馬、兵器、食糧その他を積載する主力戰艦で三百艘。

拔都魯輕疾舟——拔都留とは勇猛或は勇者を意味する蒙古言 *Batum* の對音（池内宏博士）、だから此の舟は勇敢且つ快速力の上陸用舟艇であらう。これも三百艘。

汲水小舟——千料舟の戰艦一隻毎に附屬する汲水用小舟で、ハシケ代用のボート級、これも三百艘。

士卒一萬五千——これは多分、蒙古本國からの増遣軍の兵數のみで、敵軍の兵力は諸史一致しないが、例示すると

相田二郎氏の「蒙古襲來の研究」によると

文永の役に神風は來なかつた、という荒川理博の新説について

（「東國通鑑」によられたらしい）

元、宋、軍 二五、〇〇〇
高麗軍 八、〇〇〇 計三九、七〇〇
梢工、水手 六、七〇〇
竹内榮喜陸軍少將の「元寇の研究」によると

池内宏博士の「元寇の新研究」の示教に基き補正された兵力

蒙、漢、軍	忻都軍	四、五〇〇	
蒙古よりの	洪茶丘軍	五〇〇	
高麗軍	增遣軍	一五、〇〇〇	20,000
高麗軍	三翼軍	五、六〇〇	25,600(戰士)
高麗 梢工、水手	六、七〇〇		計 32,300 人

更に「元寇の新研究」に依り補足すると、右の六、七〇〇人の高麗の乗組船員達は、大船一二六艘に對する乗員で、殘る大小艦船七七〇餘艘に對する船員等は、蒙古から供給せられたものとなすべきであるとして居られる。とすると、更に少からざる乗組船員工匠等が徴發されたと見るべきで從つて其の總數は四萬内外に達したのではなからうか。

かくて七月を以て日本侵寇の期としていたが、偶々六月十八日、高麗王元宗が薨ずるといふ不幸が突發したため、大變遅れて冬の十月となり、對馬、壹岐を侵寇して之を敗つたが、蒙古・漢・高麗連合軍司令官相互の不和に基く作戰の不統一、弓矢その他の軍需品の缺乏等により諸處陸上地點を寇掠し、申し譯的に若干の捕虜を捉え

て歸還した。

と、只これだけである。誠に簡單で、暴風雨の「風」もなければ「雨」の一字もなく、荒川博士の新説には是非擧げられなければならぬ史料であるが、何故か博士は「元史」のこの點は述べて居られない。では次の「新元史」はどうなつてゐるであらうか。

「新元史」の文永の役

清朝、元史研究の金字塔と云つたわれ、民國大總統徐世昌により中國正史に編入を命ぜられた柯劭忞の「新元史」列傳、第一百四十七、卷之二百五十、「外國二」の「日本傳」の文永の役の所を見ると「東國通鑑」や「元史」に比し流石に随分精しくなつてゐるが、最後の要點のみを記すと

劉復亨ハセ瘡重。乃引チテ所部スル先歸。是夜大風雨。官軍戰船觸シ厓石。多破壞。忽敦ス（元史の忻都）等乃乘チ夜引去。

とあり、之を明の宋濂の「元史」と比較して見ると、元軍の日本侵寇の模様は非常に詳しいが、肝心の台風の所は、「元史」には前記の通り風雨の「風」の一字すら見當らないのに、民國時代になつて撰ばれた「新元史」は、李朝の徐居正の「東國通鑑」丸寫しで、二、三カ所に同意の異字を用い、また台風の所は東國通鑑の「會々

夜大風雨」を、新元史は「是夜大風雨」と、どちらも「大風雨」の三字をそのままそつくり使つてゐる。この點「新元史」は正に朝鮮側の「東國通鑑」の鵜呑みで、やはり台風の事實を認め、蒙・漢・麗總軍司令官の忽敦（これも東國通鑑の人名で、元史の忻都）は夜陰に乗じて合浦の鎮海灣に逃げ歸り、博士の言われる撤收作戦は成功したようであるが、艦船の破壊を述べてゐるから、撤收の成功は其の一部に過ぎなかつたのではなからうか？

ただ東國通鑑にある高麗左軍司令官の金仇が海中に轉落溺死したことは「新元史」には見えない。ところで敵側の史料はこれ位にして、今度は日本側の有力史料の一つである左の史料に移つて見よう。

「八幡愚童記」と「八幡愚童訓」

博士は「東國通鑑」の「會々夜大風雨」を支那流の表現とアッサリ片付け、多少の風雨はあつたろうが、無疵で撤收作戦は成功したと言われ、「翌朝は所せまいまで博多灣上奔めきあつていた敵の艦船は一艘も見られなかつた」と、いう「八幡愚童記」の記事を採られて、難破船もなかつたのであらうと斷じてゐられるが、一體この「八幡愚童記」という本は、作者も、出来上つた年代もはつきりせず、種々の異本があるらしいが、そのうちの

「正應本」と「文明本」とが最も有名で、正應は弘安の次の年號で「正應本」は弘安の役後八年目の正應二（一二八九）年の記述と傳えられ、伏敵篇の著者は主としてこれを引用しているが、後世の潤色假託あるものとして史料の價值は「文明本」に劣ると言われている。

「文明本」は、文明十五（一四八三）年で、弘安の役後二百二年にもなるけれども、その原本は戰役當時、石清水八幡宮の敵國降伏のための祈禱等に關係のある記錄、或は戰況報告書類等に基づいて戰後間もなく記述せられたと思われる點が多いと言われ、中山平次郎博士は「元寇史研究の三參考文籍」で斷然「正應本」を排斥せられたが、昭和六年の池内宏博士も其の名著「元寇の新研究」に於て「文明本」の史的價值を重く見ていられる。

この八幡愚童記の寫本に對し「八幡愚童訓」なるものが、「新校群書類從」第一卷、「神祇部十三」に載つてゐるが、これは蒙古襲來の戰況を傳える「八幡愚童記」に關する史料で、戰役を去ること遠からざる鎌倉時代のものならん。というだけで著者も、成立年代もやはり判らないが、愚童記といい、愚童訓といい、戰況を知るには、竹崎五郎兵衛尉季長の「蒙古襲來繪詞」と共に無くてはならぬ最重要參考史料である。

が、もともと此の本を書いた目的は、八幡大菩薩の功

徳を譽め稱え、愚童に八幡信仰の信心を訓え、こまながために書かれたものであることは、一本の序文の末に記されていて、「記」といい、「訓」といい、その八幡大菩薩の神力が如何に絶大であるかを百パーセントにも二百パーセントにも信じさせんがために、ト、テツもない誇張の表現をしている點も少くないことを念頭に入れてかからねばならぬ。然し面白い戰況描寫もここでは割愛する。元寇はたやすく勝つたように私等は教え込まれて來たがどうしてどうして洵に散々な苦戰であつたことは冷靜に思いをひそめなければならぬ。幸い只の一日ですんだからよかつたのである。その苦戰の原因も述べたいがこれも省いて、本命に入るべく又も中之島圖書館を探したが、残念乍ら「八幡愚童記」は見當らなかつた（昭和三十三年夏）。伊勢の神宮文庫には有るとの事であつたが、大體は同じい様に思うので、中之島の新校群書類從の中の「八幡愚童訓」「上」の三二九頁を見た。

誠ユ、シキ城ナレドモ、博多宮崎打捨テ多クノ大勢一日ノ軍ニ堪兼テ落事爲ニ奈何。…………… 宮崎ノ宮留主ヲ始トシテ、僧俗社官固タリシカドモ、所_レ憑軍共落ヌル上ハ留テモイカ_ニ可_レ有。縦ヒ遁_レ身ト云共奉_レ捨_レ神鉢、忽敵_ニケガサセン事コソ悲ケレ。…………… 朱漆ノ唐櫃奉_レ移_ニ三所御鉢。泣々出_レ宮間餘火急ノ事ナレバ、神與ニダニモ奉_レ乗ザリシコソ目モ心

モ及レネ。……………宇美宮ヘト急グ處ニ。彼(カシコ)ニハ、ハヤ一人モナク、先ヨリ落テ閉戸樞可立入様モナシ。上ノ山ノ極樂寺ニゾ入奉ル。折節雨降添テ、衣手濡ヌ處ゾナカリケル。逃ツル跡ヲ願レバ、在々所々猛火オビタマシク燃上シカバ、是偏、敵ノ態ト恐思レテ無謂計。……………サル程ニ夜モ明レバ、廿一日ノ朝、海ノ面ヲ見遣ルニ、蒙古ノ船無一艦皆々馳歸ケリ。(愚童訓)

「愚童記」(池内博士の「元寇の新研究」の一五一頁)には
去程ニ、夜明レバ、廿一日ノ朝、海ノ面ヲ見ヤレハ、蒙古ノ船皆モトリケリ。

とあり、殆ど同様の記述であるから「折節雨降……」の所も大した違いはあるまい。

この點を荒川博士は採り上げられ、文永暴風雨否定説の一大論據とされている。成程、八幡愚童記并に愚童訓の記述の目的は前文に述べた通りであるから、初め蒙古兵をナメてかかつて大ヤケドして、水城方面に退却した日本軍の一部隊があり、宮崎八幡も焼打ちされ、人々は思い思いに逃げ隠れた慘狀を思うと、この邊で大風が吹けば、待つてましたとばかり特筆大書すべき所であるが雨の描寫は、袖を濡らす程度の有様で、この點、博士の申される所も無理はないように思われる。

次に、博士は述べて居られないが、今一つ、やはり大風は吹かなかつたのかな、とも思われる點がある。それ

は、やはり「愚童記」の右の續きに

異賊ノ兵船一艘鷹島(一本には志賀島、愚童訓も志賀島)ニカカリ逃ゲヤラデ有シモ、餘ニラ、デテ、左右ナク向者ナシ、蒙古ガ方ヨリ手ヲ合セテ助ヨト云ケレド、我行カント云ワズ助船ヲ寄ヌハ降ヲユルサヌニコソト思テ、大將、海ニ入テ失ヌ。歩兵共ハ此方ノ地ニ渡付、弓箭ヲステ、甲ヲヌグ、ソノ時ニ當テ、我モ我モト寄せ合、高名ガホニ生取ケリ。水城ノ岸ノ前ニ引ナラベテ、首ヲ切者百廿人トモ。云々

これは、同じく廿一日の朝、逃げ遅れた賊船一艘を鷹島(或は志賀島)に見付けたが、前日廿日の戦いの火藥のてつはうや、毒矢や、始めて見る騎馬民族の團隊の大陸戦法にオジ氣ついたのか、蒙古の方が手を合せて助けを求めているのに拘らず誰も進んで向う者がない、やがて敵の大將が海中に飛込んで自殺し、敵兵も甲をぬぎ弓矢を捨てたのを見て始めて、これを生取つて高名顔するとは何たる腰抜けざまであらう。随分おかしい。若し本當に台風が吹き暴れて敵艦隊が全滅に瀕している場合ならば、我軍の士氣は大いに揚がり勇壯無比の追撃戦が展開される筈である。弘安の役の台風後の模様は正にその通りであつたのに此のザマは何たることか?この記述が本當ならば、大した風雨ではなかつた様にも考えられるが博士は是にはふれて居られない。ところが、大友文書に

よると、翌建治元（一二七五）年七月十七日附で、時宗、義政の連署で、昨年の文永の役における大友兵庫頭入道（頼泰）以下の行動を譴責し向後若し忠節を致さざる者は嚴罰に處する旨を傳達して居る。我が日本軍の一部にも残念乍らこんな部隊が居た證據で、八幡愚童訓の記事も滿更嘘ではないらしい。

さて然らば、戦後最近の國史學界の論斷は如何。

讀賣の「日本の歴史」は否定

一昨年一月以來毎月續刊、ベストセラーを誇號していた其の第四卷、「鎌倉武士」の二六三頁に

さいきん氣象學者の荒川秀俊が、このときは台風季節でなかつたことをおもな理由にして、當夜の大風雨を否定する見解をしたが、當時の貴族、勘解由小路兼仲の日記（勘仲記）には「凶賊の船數萬艘海上に浮ぶ、しかるに俄かに逆風吹き來りて本國に吹き歸す、少々の船はまた陸上に馳せ上る」とあり、朝鮮がわの史料「東國通鑑」にも「たまたま夜大風あり、戰艦岩壁に觸れて多く敗る」とあるから、この新説には、にわかにしたがいがたい。冬季の大旋風の影響と考えてよからう。

との意見で、荒川説を認めていない。この讀賣の「日本の歴史」は、我國戦後の史學界の權威者を網羅し卷頭に其の顧問三人、編集委員三十三名、編集協力者七人に、

本卷擔當委員として八人の氏名の上に*印を附していて卷末の特別寄稿者以外は、目次を見ても本文を見ても誰方が一體この「第一回文永の侵入」の項を受持たれたのかサツパリ判らない。折角の良い本も之では責任の所在が明らかでなく、まことに惜しいものである。私はこの事を同社に再三提言したが、とうとう各項執筆者氏名を明確にされなかつた。

「勘仲記」の逆風説

さて、この「勘仲記」というのは、勘解由小路兼仲の日記で、姓の頭文字の「勘」と、名の末字の「仲」を取つて名付けられたもので、「兼仲記」とも「兼仲卿記」とも、また「勘解由小路中納言記」とも云われる。兼仲は、五攝家中の鷹司家の家司をしていた關係上、その日記は朝暮關係を知る重要な記録で、殊に弘安の役の部分是最も貴重とされているが、出版されているのは、建治元（文永十二年四月改元、一二七五）年より、永仁二（楠木正成の生れた一二九四年）年まで、凡そ二十年間で、肝心の文永十一年の項は、中之島圖書館にもなく、その原本は廣橋家の傳本で、今は東洋文庫の所藏となり残念乍らここでは披見を許されないで、止むなく大家の著書中に引用してあるのを轉用さして頂くより外はない。即ち

八代國治博士の「蒙古襲來に就ての研究」より援用された陸軍の竹内榮喜少將の「元寇の研究」の（十七頁註の9）を拜借する。

十一月六日戊寅、或人云、去比凶賊船數萬艘浮海上、而俄逆風吹來、吹歸本國、少々船又馳上陸上、仍大綱式部大夫（大友賴泰）郎徒等凶賊五十餘人令虜掠之、皆擲置、彼輩等召具之、可令參洛云々。逆風事神明之御加被歟。無止事可貴。其愚不少者也。

これは八代國治博士の論文文中にある兼仲卿自筆本の原文で、讀賣の「日本の歴史」は是を和文に直したものである。

結局は永遠の宿題か？

文永の神風は全くおかしい。如何に七百年近くの間とはいへ、十一月も下旬、十二月近くに台風が來たとは考えられぬ。折角氣象學上から荒川理博が全面否定の新説を持出されたけれども、如何せん先生の論據は少々薄弱の嫌いがありはすまいか。即ち

一、先生の氣象學的科學資料は、僅々五十年間に過ぎぬ。それも西紀何年頃の五十年であるのか、或は極く最近の統計ではあるまいか、今より六八七年前の自然現象が果して最近の氣象條件と全く同一である

かどうか？殊に一昨年四月に出版された博士の「日本と世界の氣象」には「文明は北進する」或は「世界の溫度があたかくなつて來ている」或は「日本の雨は近年多くなつて來た」それがどんなに廣くまた深く人類社會に影響があるかを指摘しよう。とかまた「文明は東漸するどころか北進しています」。

その陰には氣候の變動が大きな役割を演じています云々と自然現象の變動が如何に人文地理的現象と密接な關係があるかを指摘して居られるではないか。とすれば、最近五十年の氣象現象を以て、鎌倉時代の氣象現象と同一に論ぜられて果してよいものであらうか？一寸俄かには頂き難いではないか。

二、日本側の最有力資料たる自筆本の「勘仲記」の逆風説を博士は果して見て居られるのであらうか？そしてその逆風説を論破される科學的論據を見出される事が出來られるか、どうか？

三、敵側の「元史」は、全然風雨の一字もなく、日本側の「八幡愚童記」には少しく雨が降つたようであるが、高麗側の「東國通鑑」や、二十五史のうち最後の中國正史となつた言わば最も新しい「新元史」は「元史」の説を捨てて、大風雨説の「東國通鑑」説を採つてゐることの不一致はどう解釋したらよいで

あろうか？

ここに私は思う。やはり相當の風が吹いたのではなからうか、と。但し此の風が、今日のように進んだ科學的測定器も智識もなかつた時代の事として、今日の台風級のすべきか、どうか、また風の強度により名稱も種々あるようであるが、昔は齊しく大風の範圍が廣く、科學的台風級に達しないものでも大風と見る者もあり、ここに大風雨の見解の相違が記載の有無の一因となつたのではあるまいか？

つまり、文永の神風は、今日の台風級とまでは云われぬが、然しそれに次ぐ相當の大風か、或は旋風か、ではなかつただろうか？

要するに此の問題は、法隆寺の再建、非再建論（尤も最近の發掘の結果、解決の曙光が見えかけたようではあるが）、或はピラミット天文台説、非天文台説のように一寸急には解決はつきそうでないが、博士が再び起つて壓倒的筆陣を張られる時の來るのを楽しみにお待ちするより外はあるまい。